

技術・家庭科における 共生能力を育成する学習指導の研究

- 家庭分野「家族と家庭生活」の体験的な活動をととして -
(第2報)

科学産業教育室 千葉 淳子

研究協力校
花巻市立西南中学校

研究の概要

この研究は、家庭分野「家族と家庭生活」の体験的な活動をととして、技術・家庭科における共生能力を育成する指導について明らかにし、技術・家庭科の学習指導の改善に役立てようとするものである。

研究の完結年度である今年度は、体験的な活動を取り入れた手だての試案を授業実践をととして検討した。

その結果、生徒に家族や家庭に対する意識の変容が見られ、家族関係をよりよくしようとする実践的な態度が見られた。

このことから、本研究における体験的な活動を取り入れた手だての試案は、共生能力を育成する方法として効果があることが確かめられた。

キーワード：家庭分野「家族と家庭生活」 共生能力 体験的な活動

研究の目的

技術・家庭科の家庭分野「家族と家庭生活」の学習においては、共生能力の育成をねらいとしている。家庭分野で育成したい共生能力は、家族や幼児、高齢者など地域の人々との共生と、環境や資源との共生の両者の能力を含む。人々との共生においては、家族や周囲の人々との人間関係の大切さや家庭生活を営む意義を見だし、家族関係をよりよくするための具体的な方法を考えさせ、家庭生活における実践に結び付けることが求められている。

しかし、現状をみると、社会の人間関係の希薄化や家庭の機能の低下により、自分の生命の大切さ、家族や周囲の人々との人間関係の大切さ、家庭生活の意義などを実感できない生徒や、ともに生きていることについて理解できない生徒が多くなったように思われる。また、これまで自分の成長を振り返らせることはできたが、家族関係をよりよくするための実践に結び付ける指導は少なかったように思われる。

このような現状を改善していくためには、自分の生命の大切さに気付かせ、家族や周囲の人々との人間関係へと関心を高め、よりよい家族関係のために自分ができることを考えさせ、家庭において実践に結び付ける必要がある。

そこで、本研究では家庭分野「家族と家庭生活」における体験的な活動をとおして、共生能力を育成する指導方法を明らかにし、技術・家庭科における学習指導の改善に役立てようとするものである。

研究の成果

この研究は平成14年度から15年度にわたる2年次研究の2年目に当たる。今年度の研究内容は次のとおりである。

「家族と家庭生活」の体験的な活動を設定した手だての試案に基づいた授業実践計画の作成
授業実践計画案に基づく授業実践と実践結果の分析と考察

技術・家庭科における共生能力を育成する学習指導の研究についてのまとめ

1 技術・家庭科における共生能力を育成する学習指導についての基本構想

(1) 「家族と家庭生活」の指導の実態について

昨年度、家庭分野「家族と家庭生活」の指導の実態について、県内の公立中学校の家庭科担当教員を対象に行った調査の結果から、生徒の実態として「家族の形態が多様である」「家族との会話が減っている」「地域の人々との関係が希薄である」「家庭生活の意義を実感できない」などが明らかになった。また、指導の実態として、「家庭状況が複雑な生徒がいて、家族や家庭について説明しにくい」「地域と家族とのかわりについて興味・関心をもちにくい」などが明らかになった。

これらの実態を改善するためには、教師が家族モデルを用いて家族や家庭の機能について説明するのではなく、生徒が意識していなかった家族や家庭について興味・関心をもち、考えを深めさせていくことが大切であり、そのための題材、教材・教具の工夫が必要である。

(2) 家庭分野での共生能力に関する基本的な考え方

家庭分野「家族と家庭生活」では共生能力の育成を目指している。家庭分野で育成が目指されている共生能力には二つある。一つは家族や幼児、高齢者など地域の人々との共生であり、もう一つは環境や資源という物との共生である。

この研究では、生徒に人との共生能力を身に付けさせることをねらいとする。人との共生を人と人

が支えあって生きていくことととらえる。そのために必要な他者を思いやる気持ちや行動を共生能力ととらえる。生徒に共生能力を育成させるには三つの段階が必要と考えられる。第一段階として自己肯定感を高めることである。支えあって生きていることを理解するためには、自分の存在を肯定的に思えることが必要である。自分の存在が否定された中では、相手と支えあうことができないと考えるからである。第二段階として家族に目を向けることである。一番身近な存在である家族に目を向けることで、家庭生活の意義を実感させることができ、自分が支えられて生きていることを考えることができると考えられる。第三段階として幼児、高齢者など地域の人々に目を向けることである。家族だけでなく社会の中で支えあっていることに気付かせ、中学生として社会を支える一人としての自覚を育み、地域の人々との希薄な関係の改善につながると考えられる。

(3) 体験的な活動を取り入れることの意義

前述の1(1)の実態調査の結果から生徒は、家庭生活の意義を実感せずに生活していることが明らかとなった。自分が支えられて生活していることが実感されていない背景には、家庭の教育力の低下の問題、地域の方々との交流の希薄化の問題、授業等で家庭生活や地域について改めて考えさせる場の設定がないことなどがあげられる。本研究では、生徒に自分の生命、家族や地域の人々に目を向けさせるため、体験的な活動を取り入れた。家庭生活と家族について実感させるためには、体験的な活動が必要であることは、茂庭・照井(1991)の定義で明らかである。そこで、共生能力を育成するための三つの各段階において取り入れる体験的な活動を【表1】に示す。生徒の生命や家族を考えさせる場合にはプライバシーへの配慮を十分にしなければならないが、これらの体験的な活動は、プライバシーへの配慮がなされたものである。生徒はこれらの体験的な活動をとおして、自分の頭と体で自分自身の実感を伴って、自分の生命や家族や地域の人々への関心を高めると考えられる。

【表1】 各段階で取り入れる体験的な活動

段階	ねらい	体験的な活動	体験的な活動の具体的内容
第一段階	自己肯定感を高める	心理劇	浜田(2001)による家庭科の心理劇プログラム
		名前の由来を考え合う	班員の名前の由来を考え合う
第二段階	家族に目を向ける	家族調査	テレビ番組や本の家族を調べる
		ロールプレイング	新聞記事を活用して、悩みを相談する者とアドバイスを する者の役割を交代で演じる
第三段階	地域の人々に目を向ける	寸劇	もし幼児が見ていたらどういう行動をするのかを考え演じる

(4) 共生能力を育成するための学習指導の構想

学習過程の第一段階である自己肯定感を高めさせる学習活動を「自分を見つめる」ための学習活動とする。浜田(2001)は、心理劇を「ひとりひとりの存在をかけがえのないものとして受け止め、感じることを、考えることを大事にしながら、かかわるということを学ぶもの」と述べ、心理劇で学ぶよさを、「押し付けがましくないこと、自分で気付くこと、あたたかく導くこと」と述べている。そして、家庭科の心理劇プログラムを、次頁【図1】のとおり提案している。換言すれば心理劇は、自己肯定感を高めることをねらいとしており、第一段階の体験的な活動としては最良の方法である。なお、浜田の提案は一つの心理劇が100分であるので、授業実践に合わせて時間を検討する必要がある。浜田は、プログラムの「はじめの心理劇」と「心理劇」の組み合わせや実施する順番は、実態に合わせて変えることを認めている。

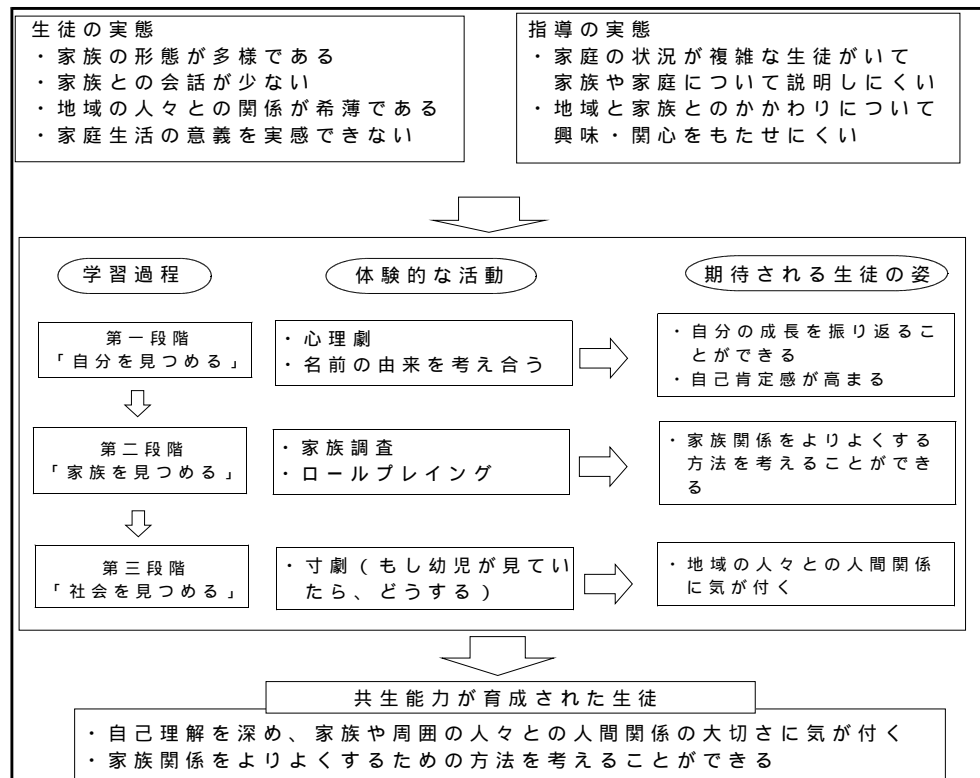
班員がお互いの名前の由来を考え合う活動は、名前に込められた願いや思いを生徒同士で確かめ合い、自分への肯定感が高まるとともに相手への思いやりの心も芽生えたと考えられる。従来、行われていた自分の生い立ちや名前の由来を家族に聞く活動は、生い立ちの記録を立派に作成している生徒がいる一方で、人に言えない家庭事情を抱え、活動に取り組めない生徒がいたことを考えると、生徒への配慮が十分であったとは言い難い。名前の由来を考え合う活動は、どの生徒でも活動できるものである。

第二段階である家族に目を向けさせる学習活動を「家族を見つめる」ための学習活動とする。テレビ番組や本に出てくる家族の中から、自分の理想とする家族を取り上げる。理想という言葉では、生徒の自由な発言が出てこないと考えて、「自分がいいなあと思う」家族として考えさせる。「いいなあと思う」その理由から、家庭は生活の場であること、衣食住や安全・保護などの基本的な要求を充足する場であること、家族とのかかわりの中で心の安定や安らぎを得ていること、血縁的なつながりではなく心理的なつながりの家族もいること、などの家庭や家族の機能を考えさせる。現在の家族の中で居心地の悪い思いをしている生徒への配慮として、家族は変化することや、家族に影響を与えている自分についても考えさせる。家族関係をよりよくする方法を考えさせ、家庭生活での実践に結び付けるための体験的な活動としてロールプレイングを行う。

第三段階の地域の人々に目を向けさせる学習活動を「社会を見つめる」ための学習活動とする。社会と自分とのかかわりを考えさせる体験的な活動として、「もし～ならば、どのような行動をするのか」の寸劇をとおして、幼児や地域の人々が自分を見ていることに気付かせ、社会の中で支えられてきた自分は、支えている一人であることに気付かせる。

第1章 家庭科の心理劇プログラム			
家庭科 中学校学習指導要領一技術・家庭編準備 (所用時間各100分)			
	はじめの心理劇 (ウォーミングアップ)	心理劇 (ロールプレイ)	ねらい
1	みんなでなわとび	大家族の朝	家族の中の自分の役割
2	波紋	町内運動会	家族関係 いろいろな家族とその和、地域の人と生きる
3	はい、交替	お母さん出かれます	
4	私の小さいころ	わがまま	家事へのかかわり、家庭の機能
5	パントマイム	私の中にいる3人の私	わがままの許される関係—家族
6	2人3人4人5人	オブジェづくり	多様な自己の認識と統合する自己、自己の成長
7	なんでもバスケット	砂場遊び	保 反抗期(1歳半~3歳)へのかかわり方 遊びの発達 2歳児、6歳児
8	ジャングル	保育園で遊ぼう	
9	ボールの七変化	おもちゃで遊ぼう	遊びによって育つもの
10	あいさつしてみよう	あいさつできるかな	育 おもちゃの機能 社会的なルール

【図1】 家庭科の心理劇プログラム



【図2】 技術・家庭科における共生能力を育成する学習指導についての基本構想図

以上のことをまとめたものが、【図2】に示す基本構想図である。生徒は、学習過程のそれぞれの段階で期待される姿に育まれ、最終的に共生能力が育成されていくと考えられる。

2 手だての試案及び授業実践の概要

授業実践は、研究協力校である花巻市立西南中学校第2学年の1学級で行った。本研究では、三つの段階のうち、第二段階の「家族を見つめる」における四時間の授業実践を行った。

(1) 手だての試案

第二段階の「家族を見つめる」の手だての試案を下の【表2】のとおり作成した。

【表2】 手だての試案

学習活動	指導上の留意点
1 家族調査から家族や家庭の機能を考える	・家族調査をとおして、一人一人が家族に目を向け、家族や家庭について考えを深められるようにする
2 家族は変化することを理解する ア 時間による変化 イ 外からの影響による変化 ウ 生徒自身の行動による変化	・身近な家族について知ってるかを確認、身近な存在である家族について、あまり知らないことに気付かせ、家族との会話の機会となるようにする ・時間の流れによる家族の変化を理解させるために視覚的な資料を活用し、家族は外からの影響を受けていることを考える時間を確保する ・生徒の行動が家族を喜ばせたり、悲しませたりすることを理解させる
3 家族関係をよりよくする方法	・家族を喜ばせると自分はどのような気持ちになるのかを考えさせ、お互いが、よい気持ちになることを確かめさせ、家庭での実践意欲を引き出す
4 家族関係をよりよくする方法「ロールプレイング」	・「ロールプレイング」をとおして家族としてうまくやっていく秘訣の一つである「コミュニケーション」の練習をさせ、家庭での実践につなげる

(2) 検証計画

家族を思いやる気持ちや態度の育成状況について、家族に対する意識の変容状況で検証することとした。検証計画は【表3】に示す。

【表3】 授業実践における検証計画

生徒が記述した学習シートを検証資料の一つとして次頁【図3】に示す。

検証項目	検証内容	検証方法
家族に対する意識の変容状況	家族や家庭についての意識の状況	1、2時間目の学習シートの記述状況と事後アンケートによる調査結果と感想から意識の変容を分析する
	家族関係をよりよくしようとする意識の状況	2時間目以降の学習シートの記述状況と事後アンケートによる調査結果と感想から意識の変容を分析する

(3) 授業実践の概要

ア 1時間目「家族や家庭の機能」(6月6日)

テレビ番組や本に出てくる家族を調査することによって、家族や家庭の機能について考えさせた。生徒が取り上げた家族の「いいなあと思う」その理由から家族や家庭の機能を考えさせた。

家族や家庭の機能について、生徒の主な記述は、「安心できる」「協力的になれる」「ケンカもするけど、その中に優しさもある」「悩みを聞いてくれる」「支え合っている」「生きる支え」「自分の得意なことを見つけられる」「家族一人一人の個性が出せる」などであり、家族の大切さを実感していることが分かる。

イ 2時間目「家族に変化を与えるもの」(6月12日)

前時には、家族の大切さを実感していたので、2時間目は次頁の学習シートの「家族について知っているかチェック」を用いて、家族についてどのくらい知っているのかを確認した。ねらいは、身近な存在である家族についてあまり知らなかったことに気付かせ、家族との会話のきっかけにすることであった。

次に、家族の変化を理解させるために、家族の10年前と10年後を考えさせた。学習シートに記入させる前に、授業者の家族の変化を資料として提示した。これは、生徒の思考作業を助け、記入時間を短くすることに役立った。10年後には、一人暮らしをしていると考えている生徒や、兄や姉が結婚をしていると考える生徒がいて、家族には生まれて育つ家族と、自分で創る家族があることを無理なく

1 時間目の学習シート

家庭科学習シート 6月6日

1 あなたが見ているTV番組の中で、家族が出てくる番組を、本名を書いてください。
例: ハリーポッター
Papa told me 金沢 佐性 トリキネとPapa

2 1で書いた家族の中で、いいあとと思う家族をひとつ選んで、その理由を書いてください。
家族名: Papa told me
その理由: 夫は、10歳の女の子が「父、家族はみんな大好き」と
生まれて前向きで明るい子で、いいと思った。

3 みんなの意見を聞いて、自分は善か悪かたけれども思うという理由を書いてください。
サザエさんやクレヨンしんちゃんの、家族がにぎやかだ。
夫が仲が良かったりするところもいいと思った。

4 2と3から家族や番組には、どのような働きがあるのだろうか?
極端に聞いてくると、正しいことは正しい、間違
ったことは間違っていると教える子どもと教えること
で自分の成長を育んでくれる。

学習をふりかえって

1 家族や番組の働きについて理解できましたか
① よくわかった
② まあまあわかった
③ よくわからない
④ 全然わからない

2 家族や番組の働きについて自分の眼で考えましたか
① しっかり考えた
② 考えた
③ あまり考えなかった
④ ポーツとしていた

3 授業に意欲的に取り組めましたか
① たいへん意欲的に取り組んだ
② まあまあ意欲的だった
③ あまり意欲的ではなかった
④ さっぱり意欲がわかなかった

4 授業の感想を書いてください。
「家族」についてこれほど深く考えたのは初めてだ。
たのびの言葉が出てきたことで少し大変だったけれど
この機会に考えられた良かった。
次はもっと意欲的に取り組めたらいいと思う
かな。

2 時間目の学習シート

家庭科学習シート 6月12日

1 家族について知っているかチェック
① 家族の生年月日を書ける Yes No
② 家族の足のサイズを書ける Yes No
③ 家族の好きな食べ物を書ける Yes No
④ 家族の好きな食べ物を書ける Yes No
⑤ 家族の趣味を書ける Yes No

2 10年前と現在と10年後の家族を書いてみよう。(絵、文字)
[10年前] [現在] [10年後]
[家族構成] 母、父、祖母、私、妹
- 犬(かわいいらしい) 母、父、祖母、私、妹
- 母 母、父、祖母、私、妹
- 父 母、父、祖母、私、妹
- 祖父 母、父、祖母、私、妹
- 祖母 母、父、祖母、私、妹
- 私 母、父、祖母、私、妹
- 妹 母、父、祖母、私、妹
(全家族揃ってあそびたいな)

3 家族は時間の流れの中で変化します。その時に家族に変化を考えたものを考えよう。
年がら、その時代の価値感、新しい家族の
増減(ヤクザ、離婚、リストラ、独立、
新しい電話、退院)、進学、専業主婦、
おこに当たる

4 3の中で、家族にうれしい変化をもたらすものを色ペンで囲もう。

5 家族をよい気持ちにするために自分ができなことを考えよう。
手洗い、みんなの悩みをきいてあげること、あんなに
飯がおいしければ「おいしい」といってあげること、
はやく(勉強とか)。

学習をふりかえって

1 家族の変化について理解できましたか
① よくわかった
② まあまあわかった
③ よくわからない
④ 全然わからない

2 家族がいろいろな影響をうけていることを自分の眼で考えましたか
① しっかり考えた
② 考えた
③ あまり考えなかった
④ ポーツとしていた

3 家族をよい気持ちにする方法を考えましたか
① たくさん考えた
② 2つ考えた
③ 1つ考えた
④ 思い浮かばなかった

4 授業の感想を書いてください。
家族というのが、こんなにたくさんのおかあさん
とで変化する(変化させられる)可能性があるとい
うのが分かった。

「注」波線は筆者が加筆したもの

【図3】 検証資料の一つである学習シート

考えさせることができた。

最後に、生徒の発言から、時間以外に家族に変化を与えるものには、宝くじに当たる、病気になる、転勤する、などの外からの影響による変化と、留学する、成績を上げるという生徒自身の行動による変化があることに気付かせ、家族関係をよりよくする方法を考えさせた。家族関係をよりよくする方法を、生徒が答えやすくするために、「家族をよい気持ちにするために自分ができること」として考えさせた。

ウ 3時間目「家族をよい気持ちにするためにできること」（6月19日）

前時の「家族をよい気持ちにするためにできること」の記述にあった「悩みを聞いてあげる」ということを切り口に、実際に悩みを聞くとはどういうことなのかを、新聞記事（朝日新聞、ティーンズメール、平成13年7月24日）を活用して考えさせた。ティーンズメールとは、中・高生の悩みに対して、服飾評論家のピーコ氏が返事を寄せたものである。

エ 4時間目「悩み相談に答えよう」（7月2日）

家族をよい気持ちにする方法として出てきた「悩みを聞く」のロールプレイングを行った。班の中で発表し、班の代表が全員の前で発表した。「コミュニケーション」の練習として考えたものである。

3 実践結果の分析と考察

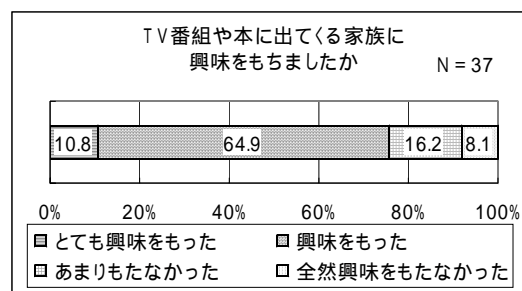
(1) 家族や家庭についての意識の状況

【表3】の授業実践における検証計画に示す検証方法である、1、2時間目の学習シートの記述状況と事後のアンケートによる調査の結果と感想から意識の変容を分析する。

家族調査について、事後のアンケートによる調査結果

【図4】から75.7%の生徒がテレビ番組や本の家族を調査する活動に、興味・関心をもったことが分かる。

家庭や家族の機能を、「家庭は生活の場であること」「衣食住や安全・保護などの基本的な要求を充足する場であること」「家族とのかかわりの中で心の安定や安らぎを得ていること」「血縁的なつながりだけでは



【図4】 家族調査への興味・関心

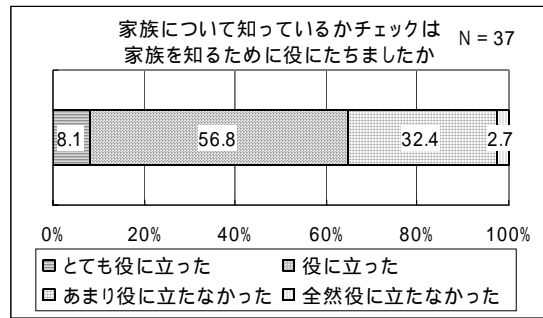
なく心理的なつながりの家族もいること」の四つととらえていたが、生徒の発言や記述から出された家庭や家族の機能は、「家族とのかかわりの中で心の安定や安らぎを得ていること」「血縁的なつながりだけでなく心理的なつながりの家族もいること」が多かった。 について気付かせるのは、難しいと考えていたが、そのような内容を考えさせるテレビ番組が放映されていたため、気付かせることができた。「家庭は生活の場であること」「衣食住や安全・保護などの基本的な要求を充足する場であること」については、記述する生徒が少なく、生徒のとらえがあいまいである可能性がある。

授業後の生徒の感想には、「家族についてはじめて考えることができてよかった」「家族の働きについてよくわかった」「家族は必要だと思った」などの記述が多かった。以上から、生徒は授業をとおして家族に目を向けるようになったと考えられる。

2時間目に用いた「家族チェック」については、次頁【図5】の事後のアンケートによる調査結果から、家族を知るために役に立ったとした生徒が64.9%であった。「家族チェック」の結果は、5問中全てYesの生徒はいなかった。また、全てNoになった生徒は半数であり、分かっているようでも、質

問をされると自信をもって答えられないといった状況であった。身近な存在である家族についてあまり知らないことに気付かせることができ、家族との会話のきっかけになった生徒もいてねらいは達成できたと考えられる。

次の授業実践後の感想からは、実践前は家族や家庭について考えたことがなかったのに、実践後には家族や家庭について考えるようになり、さらに、自分の家



【図5】 家族チェックの有用感

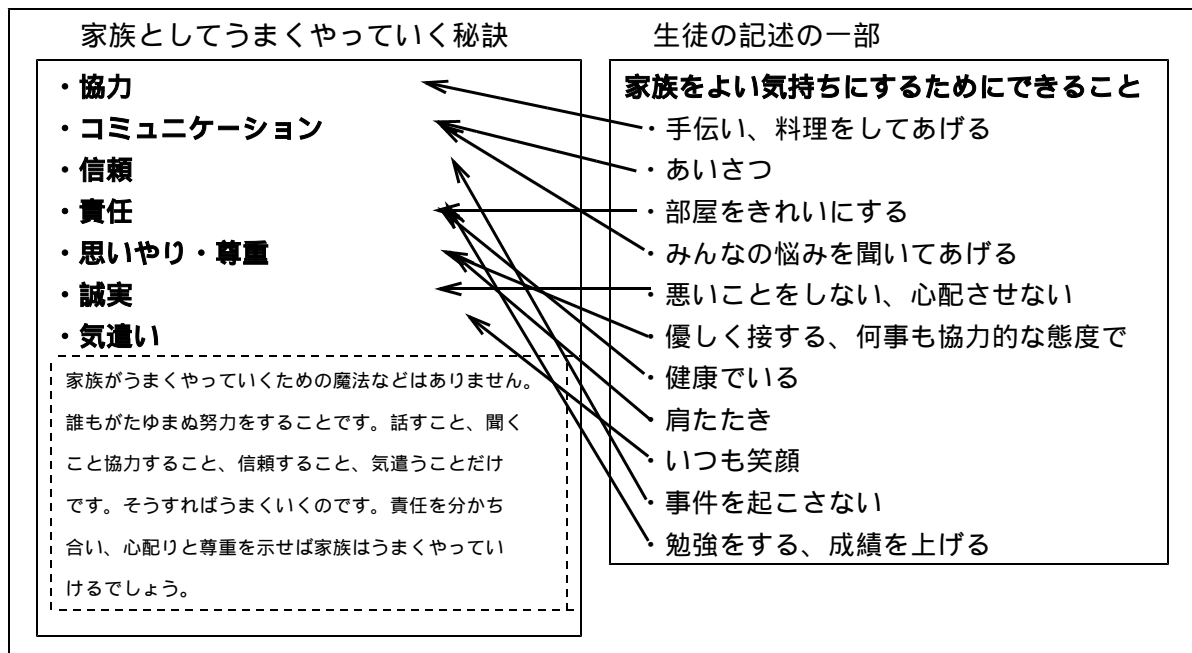
族に対する思いが表れているという家族や家庭に対する意識の変容の様子を読み取ることができる。

生徒の感想	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業を受けて、私は、ふとした時に親の事を考えるようになった。やっぱり、親や家族がいないと生きていけないと思う。親や家族は私が死ぬまで一生大切にしなければならないと思う。 ・ 家族とか、家庭とか、今まであまり考えたことがなかったことだけど、よくよく考えると家族のだから おこっている時、困っている時は、家の中が暗くなっていたなあと思った。授業をうけて、家族は奥深いなあと思った。これからは、家族の力になってあげたい。 ・ 家族っていてもいなくても同じだと思っていたけど、よく考えてみると、やっぱりいなくちゃ自分だけじゃなんにもできないことに気付いた。人には言えない悩みも家族だから言えることもあった。家族って大切なんだとはじめて気付いた。
-------	--

以上のことから、手だての試案に基づく授業実践をとおして、家族や家庭に対する意識の変容がみられたと考えられる。

(2) 家族関係をよりよくしようとする意識

【表3】の授業実践における検証計画より、2時間目以降の学習シートの記述状況と事後のアンケートによる調査の結果と感想から意識の変容を分析する。



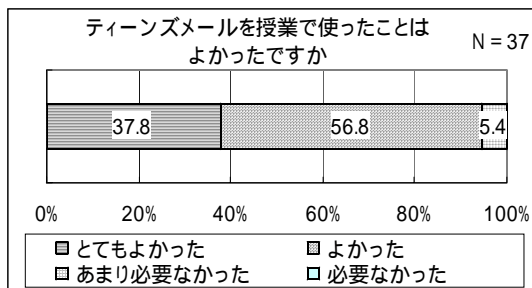
【図6】 生徒の記述の検証を示したもの

アメリカの家庭科の教科書である「ティーン・ガイド」の中の、「家族としてうまくやっていく秘訣」の七つの大事な要素がでてくれば、家族関係をよりよくする方法を考えることができたとした。上の【図6】の左側が「ティーン・ガイド」の「家族としてうまくやっていく秘訣」である。右側が

生徒の記述の一部である。生徒の記述と「家族としてうまくやっていく秘訣」の要素とを照らし合わせて、同じ内容であると判断できたものを矢印で結んだ。この結果から家族関係をよりよくする方法を考えることができたと考えられる。

3時間目と4時間目に用いた「ティーンズメール」を授業で使用したことについては、事後のアンケートによる調査結果【図7】から94.6%の生徒が、よかったとしている。生徒に興味・関心をもたせる資料の一つとしてティーンズメールを活用できると考えられる。

ティーンズメールの本が2003年4月に発行されたので、授業実践の期間中に教室において貸し出しをした

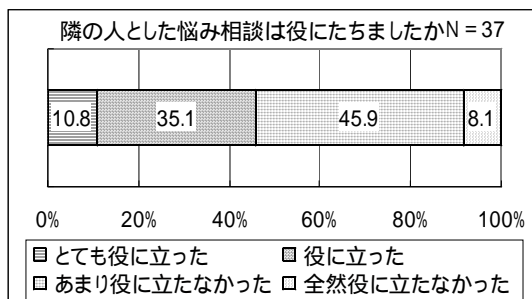


【図7】 ティーンズメールの活用

ところ数人の生徒が読んでいた。「私たちだけじゃなく中学生から高校生の人が、いろいろな悩みをもっていることが分かった。」という感想があり、自分の年齢に近い人が同じような悩みをもっていることに安心した生徒も数人いた。「ピーコさんの返事は、すごくはっきりしていてとってもいいアドバイスで心に残りました。」との感想から、ピーコ氏という年齢の異なる人の考えを知ることができた資料は生徒の心に働きかけるものがあったからと考えられる。

「ティーンズメール」の資料については肯定的な意見が多かった。この資料を用いて行った「ロールプレイング」については、多くの生徒が、「相手の気持ちを考えて悩み相談に答えた」と記述しており、「ロールプレイング」をとおして、「コミュニケーション」の練習だけでなく「気遣い」「思いやり」の大切さを実感したと考えられる。

しかし、事後のアンケートによる調査の結果【図8】から「ロールプレイング」が役に立ったとする回答は、45.9%であった。班の代表となって、他者から、アドバイスの内容等を認められた生徒は印象に残っている授業として感想を書いていたが、アドバイスを自分で考えてから行う「ロールプレイング」であったので、アドバイスがうまく作れなかった生徒にとってマイナスの印象となる授業であったと考えられる。全員が満足できる「ロールプレイング」の方法については、さらに検討する必要があると考えられる。



【図8】 ロールプレイングの有用感

以下の感想から家族関係をよりよくする方法を実践しようとする意識と実践している姿を読み取ることができる。

生徒の感想	<ul style="list-style-type: none"> ・私の家は、弟が2人妹が2人で私を入れて5人なので、とてもうるさくて、すごくウザくていや。それに、疲れて家に帰ると、なにかといてうるさいおばあちゃんもきらいだけど授業を思いだしてすきになるようになりたいと思う。 ・家族を前より大事にするようになったし、前よりたくさん話すようになった。家族にやさしくなったと思う ・授業をうけて変わったと思うことは、家族にたいする考え方が変わりました。そのおかげで、家族との会話もふえたと思います。 ・家族の気持ちになって考えることができるようになった。 ・家族がどのようにすれば喜んで自分も喜ぶのかを、はじめて考えました。家族の接し方も少し変わったと思います。
-------	---

以上から、手だての試案に基づく授業実践をとおして、家族関係をよりよくしようとする意識が芽生え、家族を思いやる気持ちや態度が育成されたと考えられる。

「家族を見つめる」の4時間の授業実践をとおして生徒が家族の授業をどのように意識しているのかをアンケートによる調査結果【図9】～【図11】に示す。

【図9】から家族の授業を91.9%の生徒は役に立ったと回答している。【図10】から家族の授業を81.0%の生徒は必要だと回答している。【図11】から91.8%の生徒が4時間の授業をとおして学んだことを生活に生かそうと思っていると回答している。

以上のように、今回の「家族を見つめる」段階の4時間の手だての試案に基づく授業実践は、生徒の高い支持を得たことが分かる。

生徒は家族に関する授業を必要と考えていることが分かる。この意識は生徒の感想から読み取れるように、授業の中で「家族についてはじめて考え」、そして、「家族って大切なんだ」という意識が、芽生えたからと考えられる。この家族に対する意識の変化から、手だての試案に基づいた授業実践は家族や家庭の授業の一つとして提案できると考えられる。

4 共生能力を育成する学習指導の研究のまとめ

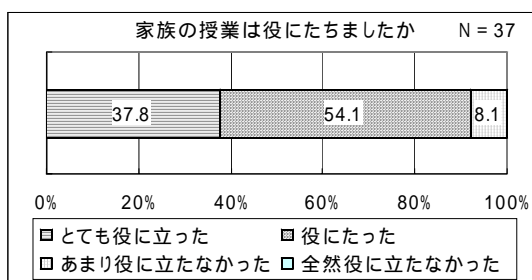
研究協力校と連携をとりながら行った授業実践で明らかになったことは次のとおりである。

(1) 成果

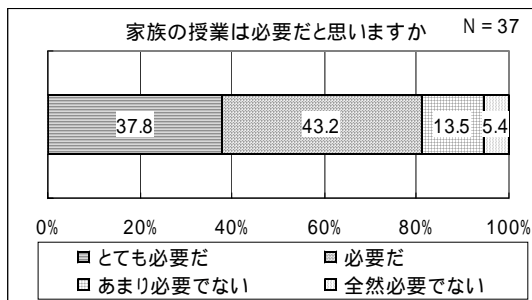
- ・「家族を見つめる」における体験的な活動として「家族調査」と「ロールプレイング」を取り入れることにより、生徒は家族関係をよりよくする方法を考えることができた。また、考えた方法を実践しようとする態度が見られた。このことは、家族との共生能力が育成されたと考えられる。
- ・「家族調査」でテレビ番組や本に出てくる家族を取り上げたことは、家族に対する興味・関心を引き出すのに効果があった。「いいなあと思う」家族について発表することは、授業の雰囲気をよくする効果があった。
- ・「ロールプレイング」をとおして、生徒は相手の気持ちを考えて悩み相談に答えることができ、「コミュニケーション」の練習だけでなく「気遣い」「思いやり」の大切さを実感することができた。
- ・授業実践の結果から、生徒が家族や家庭の授業を、必要であり役に立つと考え、学んだことをこれからの生活に生かそうと思ったことから、本実践は、プライバシーへの配慮をした家庭分野「家族と家庭生活」の授業の一つとして提案できると考えられる。

(2) 課題

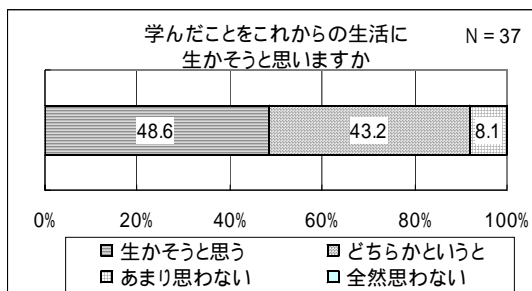
家族や家庭について関心を高める体験的な活動の一つとして取り入れた「ロールプレイング」の効



【図9】 家族の授業の有用感



【図10】 家族の授業の必要性



【図11】 実践への意識

果的な活用の仕方について検討する必要がある。

以上のことから、家族との共生能力を育成する上で「家族と家庭生活」の第二段階「家族を見つめる」の体験的な活動は有効であったと考えられる。

研究のまとめと課題

1 研究のまとめ

本研究は、家庭分野「家族と家庭生活」において、家族や家庭についての関心を高める体験的な活動をとおして、技術・家庭科における共生能力を育成する指導方法を明らかにし、技術・家庭科の学習指導の改善に役立てようとしたものである。

2年間にわたる研究の成果は次のとおりである。

- ・「家族と家庭生活」の指導に関する実態調査を県内公立中学校の家庭科担当教員を対象に実施し、学習指導上の課題を明らかにし、課題を解決するための手だての試案及び指導計画、評価計画を作成することができた。（昨年度の発表資料参考）
- ・共生能力を育成するための体験的な活動を取り入れた手だての試案の「家族を見つめる」段階の授業実践をとおして、期待される姿の育成の状況及び家族や家庭に対する意識の変容を分析することができた。

2 今後の課題

「家族と家庭生活」の手だての試案の全段階の実践をとおして、共生能力が育成されたのか検証する必要がある。

【引用文献】

- 茂庭隆彦・照井一明，地殻変動を実感させる高等学校地質教材の開発 - 地学リテラシー育成を目指して - ，地学リテラシーを得させるための環境学習に関する研究，代表下野 洋，平成9年度～平成10年度科学研究費補助金（基盤研究B(2)）研究成果報告書，pp，126-131，1999
- 浜田 駒子著，「家庭科における心理劇の実践」，家政教育社，2001，p 7，10，137
- ヴァレリー・チェンバレン著 牧野カツコ監訳，「ティーンガイド - 人間と家族について学ぶ アメリカの家庭科教科書 - 」，家政教育社，1992， pp，132 - 137

【参考文献】

- 朴木佳緒留著，「現代家族学習論」，朝倉書店，1996
- 武藤八重子著，「家庭科教育再考」，家政教育社，1998
- 石塚千登勢，高等学校家庭科における保育への関心を高める指導展開の工夫に関する研究，平成12年度岩手県教育研究発表会資料，2001
- 佐藤郷美，よりよい家族関係を創造する生徒の育成を目指した指導の一試み，平成13年度全理セ技・家部会 研究集録，仙台市4 - 2，2001
- 中間美砂子，「K G K ジャーナル通巻349号」，開隆堂，2002
- 朝日新聞文芸部編，「ティーンズメール」，株式会社教育史料出版会，2003